教頭会報

栃木県公立小中学校教頭会
発行者　小　森　一　則
編　集　広　報　部

もくじ

◎あいさつ …… 1
◎県の動き　総会・講演会 …… 2
◎要請部・ＩＴ部の活動 …… 3
◎全国研究大会（秋田大会） …… 4・5
◎特色ある学校 …… 6
◎地区だより …… 7
◎ひろば・編集後記 …… 8

会長あいさつ

教頭会長として　～雑 感～

宇都宮市立若松原中学校　小　森　一　則

「スマートであれ！」私の高等学校時代の鈴木章介校長先生（茂木高等学校）が朝会の度におっしゃっていた言葉が今も記憶に残っている。

その当時は、何のことだか良く理解していなかったが、年を重ねると自分なりの解釈ができてきた。（右枠）

大きな事を達成するために小さな目標を立てるのだがその小さな目標の達成の積み重ねが大きな目標の達成につながる。

【目標の持たせ方のキーワード】

S	；Specific	（明確である）
M	；Measurable	（評価基準が示されている）
A	；Attainable	（努力すれば達成できる）
R	；Result	（結果志向である）
T	；Time bound	（タイムラインが示されている）

それなので、同僚に対して校務分掌等で目標を持たせるとき、自分自身“スマート”を意識して指導してきたつもりである。さらに、もう一つ言い続けてきたことは、「学習の内容をそのまま伝えるのではなく、その学習がこれから生きていく上で大切であることを子ども達自身に体験させることが先生の責任である。」という良い先生になるための基本的な条件である。

さて、我々教頭は、教師一人一人が、自信と誇りをもって子どもたちに向き合い、新しい時代にふさわしい教育の創造に向けた学校運営を目指すため、常に子どもたちの変化や社会の動向を的確に把握し、よりよい教育の在り方を不断に模索し続けることが求められている。

本県でも「とちぎの子どもたちを、自らの力で、自分の未来を力強く切り拓いていける人間に育てる」ことを基本理念とした「とちぎ教育振興ビジョン三期計画」が実施され、今年度は４年目を迎えている。

また、全国公立学校教頭会は、平成26年度から平成28年度までの３年間を第十期とし、第九期の内容を継続しつつも、文言を整え、子どもたちの「生きる力」の育成を目指した継続的かつ協働的な研究を進めるため、全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」を掲げた。本年度は、第十期の最初の年となっている。

我が栃木県公立小中学校教頭会においても、新しい時代を切り拓いていかねばならない。我々教頭は、そのほとんどが学校に一人の「一人職」である。そこで、職能団体である本会は、我々自身の学び合いの場としての意義を深めていく必要がある。子どもたちに「学び合い」が必要なように、我々教頭にとっても、互いに学び合うことは必要不可欠であると考える。

今後も、先輩方の研究成果や実績を継承しつつ、子どもたちのためのよりよい教育の推進を目指し、あまたの課題の解決やその対応に向けて、会員相互の協働意識を確認し合い、より一層研究の充実・発展に努めていく所存である。

――県教頭会の動き――

定期総会

用　意　周　到

会員受付係　那須塩原市立西那須野中学校　丑　越　　薫

今までたくさんの原稿依頼を受けてきたが、今回の「教頭会総会の会員受付の様子を書く」という依頼は、何を書いたらいいか、本当に悩んだ。会員の皆さんが目にしていること以外、何も書くことはないと思ったからだ。

しかし、４回の総会受付を改めて振り返ってみると、一般参加の先生方が知らなくて、受付係だけが知っていることが一つだけある。それは、事務局の準備の周到さだ。那須地区の私は、役員打合せに行けないことも多い。そんな私が責任者になっても、当日の仕事が円滑に進むように準備してくださっている。たぶん、それは他の係においても同じことが言えると思う。

「学校で一番忙しい」と言われる教頭が集う教頭会。それは、学校の仕事との両立に苦労しながら教頭会のために尽力する執行部の方や、それを陰で支えてくださっている事務局の方がいてこそ成り立っているということを、この原稿を書くことによって、改めて強く感じた。

講　演　会

豊かな人間関係を育む学校づくり

奈良教育大学教職大学院　准教授　粕　谷　貴　志 氏

上三川町立明治南小学校　北　條　久　男

講演の中で、学級集団の現状と課題については、自校の児童を日頃観ていて考えさせられた。つまり、一つ目は「発達のバラツキが大きいこと」、二つ目は「教えるだけでは難しい児童生徒の増加」、三つ目は「集団になることが難しいこと」である。更に、いじめ集団の構造では、被害者・加害者・観衆・傍観者のことは再確認でき、学年が上がると「仲裁者」が減り、「傍観者」が増える傾向にあるということで「やめろよ。」と言える児童生徒が減っているというのは実感として感じる。また、「いじめ加害者の援助ニーズ」では、今まで「いじめ被害者の援助ニーズ」を中心に考えてきたので、いじめをなくすためには加害者に対する援助も考えていかなければならないということが認識できた。今、いじめは見えにくくなっているので、構造を深く理解する必要があると感じた。いじめの発生割合が学級集団の状態と関連があるということで、あらためて学級経営力が大切であると思った。児童生徒が学校での大半を過ごす学級、その学級が正常に経営されていることがいじめをなくすポイントの一つであると思う。そのため、学級担任は児童生徒に平等に接し、その心の動きに対して目配り・気配りをし、児童生徒の悩みなどを敏感に感じ取らなければならない。しかし、実際に実行することは難しい。そこで、リレーションの前提となるルールづくり、不安・緊張の低下、承認感と居場所づくり、社会的スキルの学習、かかわりの機会の保障、動機付け・伝え合いなど粕谷先生の話は非常に参考になった。

いじめは重大な人権侵害であるので「いじめ防止対策推進法」が施行された。いじめを早期に発見し、いじめを未然に防止することは喫緊の課題であると思う。いじめを受けている児童生徒がどのような思いで登校しているか、あるいは登校できなくなっているかを理解し指導していかなければならない。この講演を聴いて教頭（副校長）として、いじめ防止の最前線に立つ教職員が児童生徒を正しい方向に指導できるように調整する必要があると強く思った。

全国要請推進部長会報告

県教頭会要請部長　日光市立大桑小学校　武　田　幸　雄

７月15日・16日の２日間にわたって、全国公立学校教頭会「平成26年度全国要請推進部長会議」が東京で開催された。

15日は、千葉県習志野市立谷津小学校の米満裕校長による「ナンバー２の誇りと希望を」の講演を聴いた。教頭経験が７年間あり、全国教頭会の会長も経験した方のお話は、参加者と同じ目線での悩みや解決法だったので、とても心に響くものであった。続いて、教頭職の抱える課題や学校を取り巻く教育問題についてグループ協議が行われた。各県の現状や課題が浮き彫りにされる有意義な時間となった。また、要請文についても変更点のお願い等、建設的な意見が出された。

16日は、文部科学省の安井順一郎初等中等教育局企画官による「初等中等教育の諸課題について」の講演を聴いた。１．海外の教育状況　２．子どもたちや学校現場を取り巻く状況　３．最近の動向の３点について、分析・説明がなされた。特に、「教員万能主義からの脱却」「今後の教育改革の課題」等、「学校現場の多忙をよくご理解いただいた上でのご提案」や「今後の教育改革の動向を知ることができた」のは大変有り難かった。

〈要請書を手渡す　中村副会長（中央）片岡要請副部長（右）〉

その後、本県選出国会議員を国会議事堂近くの議員会館事務所に訪ね「人材確保法の趣旨尊重」、「義務教育費国庫負担の１／２復活」、「地方交付税措置と教員給与の在り方」について要請活動を行った。ご本人に直接お会いすることができなかったが、真に教育現場の状況を理解した上での政策や、国家百年の大計としての方向性を示唆してもらうことを、機会を捉えて要請していきたい。

ＩＴ部活動状況報告

県教頭会ＩＴ部長　矢板市立泉中学校　小　口　公　正

ＩＴ部会は、県教頭会のホームページの管理運用を行っています。現在のホームページは５年前にリニューアルし現在に至っています。アクセス件数は、７月１日現在で約52,000件です。１日平均約200件のアクセスがあり、ここ数年で県内の教頭先生方に県教頭会のホームページが認識されつつあると感じています。

ＩＴ部員の方々には、各地区の教頭研修会の計画や研修内容の掲載をお願いしています。各地区教頭会の活動の様子を参考にしていただければと思います。また、研究大会の連絡や紀要原稿についてのお知らせ、事務局、各部の連絡事項等もありますので、定期的にご覧になるようお願い致します。

先日行われたＩＴ部研修会での情報交換では、ＳＮＳに関するトラブルが各学校で問題になって、特にラインによるトラブルの増加が話題となりました。これらのトラブルはシステム的に表に出にくいため、問題がわかった時点ではかなり指導が難しい状況になっている場合が多く、各学校で指導の難しさを感じていることが分かりました。また、携帯を持たせない運動を展開している市町があり、なかなか徹底できないことや保護者への啓発が課題であることがわかりました。

今後はホームページから県教頭会の情報を随時発信していきますので、定期的にご覧になるようお願い致します。なお、教頭会ホームページへのログインＩＤ・パスワードは今後定期的に変更します。今後会員へのお知らせは、定期総会時に資料を配付しますのでご確認下さい。

――全国研究大会（秋田大会）――

開会式・シンポジウム

宇都宮市立雀宮中学校　熊　倉　　仁

第56回全国公立学校教頭会研究大会が７月30日㈬～８月１日㈮の３日間にわたって、秋田市を会場に全国から二千人以上の参加者を集めて盛大に開催されました。

当日は、開会行事に先立って、郷土文化紹介として、地元の保戸野小学校並びに築山小学校のクラブによる「竿燈」と、山王中学校吹奏楽部による「演奏」とが披露されました。長い竿燈をバランスよく支える小学生の懸命な姿や、16期連続しての全国大会出場を続けている美しいハーモニーは、ともに参加者に深い感動を与えたものになりました。

開会行事では全国公立学校教頭会長から、「『継続性』『関与性』『協働性』に焦点を当てた実践研究を基にした協議を通して、教頭職としての専門性を高める機会としたい」とする大会趣旨を踏まえた挨拶がなされました。

続く全体シンポジウムでは、コーディネーターの勝野正章氏（東京大学大学院教育学研究科教授）の進行の下、文部科学省初等中等教育局視学官の杉田洋氏、前秋田県教育委員会教育長の根岸均氏、元秋田県教育庁教育次長の濱田純氏の３人のシンポジストにより、秋田大会のサブテーマ「絆を大切に　生涯にわたって自立・協働・創造していく子どもの育成」についての熱心な意見交換が行われました。

杉田氏からは、「連帯感や絆づくりを図るうえで学校教育の中で果たしている特別活動の役割は極めて大きい」ことが再確認されるとともに、根岸氏や濱田氏からは、「秋田の教育を支える原動力となった『ふるさと学習』導入の背景やキャリア教育との関連」についての説明があり、大会初日の課題把握・共有の場として、とても有意義な時間となりました。

記 念 講 演

記念講演を聴いて

上三川町立北小学校　柴　山　　洋

８月１日、秋田県立武道館において、読売新聞特別編集委員橋本五郎氏を講師に迎え、「いま教育に必要なもの」と題した記念講演が開催されました。政治記者として、長年にわたり多くの人と出会い、関わってきた経験をもつ橋本氏の講演は、人の気持ちに寄り添うことの大切さについて改めて考えさせられるすばらしい講演でした。

橋本氏は「先生は、その人の人生を左右する存在だ。」として、自身にとっての３人の“師”について話されました。一人目は、高校生のときの先生です。「『汝、何がためにそこにありや。』と、いつ誰に問われても即座に答えられるように。」と言われ、以来、謙虚に自分を振り返るとのことでした。教育についても、“教育は青少年の足を洗うことである。身を低くして膝を地面に着けなければ洗えない。”と例えて話されました。二人目は、癌で胃を全摘出したときの医師です。闘病生活をとおして、何事も基本的に信頼関係がなければダメなのだと思ったそうです。三人目は、母親です。20年前に亡くなられましたが、大学卒業時に言われた、①何事にも手を抜いてはならない。全力で当たれ。②傲慢になってはならない。常に謙虚であれ。③どんな人でも嫌いになることはない。その人の中に自分よりも優れたところを見ろ。を、今でも忘れずに心がけているそうです。

講演を聴き、子どもたちの生き方に大きく関わる、教師という職の重さとすばらしさを改めて感じることができました。また明日から、新たな気持ちで子どもたちのために頑張っていこうと思います。

全国研究大会秋田大会報告

全国公立学校教頭会研究部長として大会に携わって

宇都宮市立岡本小学校　小　川　順　子

全国公立学校教頭会研究大会は、全国公立学校教頭会が主催し、開催都道府県が運営する形で、毎年７月下旬から８月上旬に開催されています。今年は、７月30日㈬～８月１日㈮に秋田県秋田市で行われ、全国各地から約2,300名の副校長・教頭が集まりました。

大会前日、全公教関係者は全体会場となる秋田県立武道館に集合し、実行委員会関係者との合同打合せ会を行いました。詳細な運営要項をもとに日程や役割について確認し、開閉会式、シンポジウム等のリハーサルを行いました。全公教研究部長の主な役割は、大会第１日に基調提案、シンポジストとの打合せ、分科会運営委員会の挨拶、第２日は会長・副会長とともに各分科会の巡回、３日目は分科会まとめの発表というものです。

初めての全国大会参加、研究部長として緊張して臨んだ全国大会でしたが、大会開催県関係者による行き届いた準備と心温まる配慮に感激し、全公教役員や本県参加の先生方からの言葉かけに勇気づけられた４日間でした。多くの方に出会い、刺激を受け、新たな気付きを得ることができました。また、研究部として役割を担い、分科会の進め方やまとめについて話し合ったり、今後の諸事業について相談したりするなかで、親睦を深め連帯感を高めることができました。

全国大会以降これからが、今年度メンバーでの企画立案・実行の正念場となります。本大会で得られた有益な情報や知見が、各地区教頭会や学校に伝えられ、今後の取組や教育実践に生かされることを期待するとともに、来年度の全国大会を見据えて、着実に研究を推進していけるよう努めていきたいと思います。

第６分科会に参加して

宇都宮市立戸祭小学校（前全公教総務部員）　渡　邉　　宏

第６分科会は、副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題です。昨年大分大会までは他の分科会同様、提言者の発表をもとにグループ討議を行っていましたが、今年度より全国公立学校教頭会（全公教）として副校長・教頭の調査結果の分析活用や文教政策の解説を行い、教育政策提言活動に対する全国の副校長・教頭の認識を深める場となることを期して分科会の内容を変更しました。

当日は、全公教調査部から昨年度の調査結果「副校長・教頭の勤務状況」「メンタルヘルス」「費やしたい職務と実際に費やす職務」等の報告をもとに、『副校長・教頭の職務を遂行するために』『若手やミドルリーダーを育成する方策』についてグループ討議を行いました。各地域ともに副校長・教頭職は多忙であり、やりたいことと実際に時間を費やすことのギャップを埋めるには管理職の学校経営の見直しが肝要なのではないか。また、若手を育成するには、先ずミドルリーダーに自覚を持たせることが先決ではないか。などといった意見が出され、副校長・教頭職のやりがいと職責に対する理解が一層深まりました。

午後は文科省安井順一郎企画官から、最新の教育諸政策や教育再生実行会議に関する資料をもとに講演がありました。世界各国の教育関係者から日本の教師の優秀さが評価されていることや、より良い職場環境・待遇を目指して財務省と交渉・調整に尽力されていることを伺いました。

その後、全公教総務部より文教政策の要請についての解説があり、３つ目の討議のテーマ『魅力ある学校づくりを実現するために、今できること』をテーマに話し合いがもたれました。

新たな試みでの第６分科会でしたが、活発なグループ討議と熱のこもった意見交換は昨年を上回る大盛況だったと、終了後前年度の総務部員と共に胸をなでおろしました。

汗と涙と感動ある学校行事

下野市立石橋中学校　秋　山　道　治

本校は、創立57年目となる下都賀地区でも３番目に生徒数が多い中学校です。

本校の特色の一つに、生徒主体の感動ある学校行事があげられます。特に運動会は、３の１、２の１、１の１で一つの縦割り軍団を作り、６つの軍団の対抗で実施します。ほとんど教師が前面に出ることなく、３年生の応援団を中心として、練習から本番までの運営を行う体制ができています。そして運動会の一番のメインが６つの軍団毎に行う集団演技です。集団演技の構成・一つひとつの振り付け・練習内容と方法・曲まで全てを３年生が夏休みから考え自分たちでマスターした後、後輩に教えていきます。生徒達が知恵を出し合い一つのモノを創り上げるまでには、何度もうまくいかずに挫折感を味わいます。しかし、動きを理解してくれない下級生を上級生がつきっきりで指導する姿に下級生は尊敬を抱きます。応援団員が120名以上の生徒を指揮する姿に下級生はあこがれを抱きます。本校では練習の過程を大切にすることで、生徒に感動体験を与え成長させています。今年の運動会も生徒達の汗と涙で感動の幕を閉じることができました。

地域と連携した学校教育　～「地域応援隊」と共に～

さくら市立喜連川小学校　二階堂　　武

本校は、旧喜連川地区の５つの小学校を統合して平成22年度に開校した学校で、現在504名の元気な児童と41名の教職員が日々の学校教育活動に勤しんでいます。

さて、本校の教育活動の特色と言えるものに「喜連川小学校支援地域本部（喜連川小学校地域応援隊）」があります。これは、地域全体で学校教育を支援する体制づくりの推進と地域教育力の活性化を図るため、学校開校と同じ平成22年度にスタートしました。

７つの応援隊があり、実際の活動としては、毎月第１月曜日の昼休みに子どもたちと昔遊びをする「遊び応援隊」や、水曜日の朝に本の読み聞かせを行う「図書応援隊」、第３月曜日の清掃時に登場する「お掃除の神様隊」があります。また、「子ども安心応援隊」「子育て応援隊」と「学びの環境応援隊」があり、延べ132名のボランティアの方が活躍しています。さらに、学校からの要請を受けて学習指導における支援活動をしている「授業応援隊」があります。今年度は既に４学年の図画工作科における木工細工活動、５学年家庭科の手縫い実習で支援をいただき、児童は安心して作業に取り組むことができました。

この後、２学年の生活科や３学年の総合的な学習の時間等の授業で予定をしています。さらに、授業とは別に夏休み中に開催するサマーチャレンジ（24講座から児童が選択して自由参加。８月６・７日に開催）も地域応援隊の皆さんの協力を得て実施しています。

本校は、このようにたいへん恵まれた環境にあるわけですが、今後もより良い教育活動の展開を目指し、「地域応援隊」との連携を図っていきたいと思います。

支え合い学び合い、一体感のある教頭会をめざして

上都賀地区小中学校教頭会長　宇賀神　　明

上都賀地区小中学校教頭会は、鹿沼市・日光市の小学校53名、中学校26名の教頭79名で組織され、本部役員の他、研究部と調査部の２つの部をおいて、各市より選出された部員を中心に活動しております。

研修会は、５月・11月・２月の年３回開催しています。５月は、総会と上都賀教育事務所の先生方による講話、11月は、外部講師による講話、そして２月は、上都賀教育事務所の先生方の講話の後、班別協議（分科会）を行っています。分科会では、研究部より出されたテーマについて、各学校での実践を持ち寄り、６名程度の少人数で協議をしています。

上都賀地区は、極小規模校（へき地複式校）から大規模校まであり、それぞれの地域がそれぞれにすばらしい特徴を有している地区です。ですから、本地区の教頭は、その地域に根ざした教育の実現に取り組んでいかなければなりません。しかしながら、教頭としてどう保護者や地域とかかわり、どう連携を取っていくかは、日々試行錯誤の連続です。ですから、上都賀地区教頭会の教頭は、お互いに支え合い学び合いながら、切磋琢磨して、成長していかなければならないのではないでしょうか。せっかく縁あって、同じ教頭会に籍を置くのですから、この縁を大切にして、一体感のある教頭会にしていきたいと思います。

今年度は、第十期　全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」の１年次にあたり、小学校は「組織・運営に関する課題」に、中学校は「教育環境整備に関する課題」の研究に取り組んでいます。今後も、支え合い学び合い、一体感のある教頭会をめざし、日々努力を重ねていきたいと思います。

創造的な教頭会をめざして

足利市立小中学校教頭会長　髙　松　博　仁

「途方に暮れております。」

今年度の会長の挨拶で、まるで枕詞のように、何度このせりふが語られたことか？

33名の県内ではややこぢんまりした栃木県南西部の教頭会は、今年なんと20名の新任の教頭先生。退職された教頭先生が５名。ため息をつきながらのスタートとなりました。その時その時の目の前の課題に翻弄されているだけの状態でのスタートです。

そんな中、６月24日㈫の研修会では、ＮＨＫ宇都宮放送局前局長の北出幸一氏をお招きし、「軍師官兵衛に学ぶ指導者の在り方」という演題でご講話をいただきました。貴重なお話の中に、リーダーとして、また、リーダーを支えるまさに教頭職としての在り方を考えさせられるなど示唆に富む内容が印象的でした。

今年は関ブロ大会において、足利が当番として５Ｂ分科会「教職員の専門性に関する課題」の提言を行います。研究内容の引き継ぎ、事務的な引き継ぎ等がスムーズにいくとは限らない中、中心的に役割を担っていただく先生方には大変なご苦労を引き受けていただいています。足利の教頭先生方の力を結集していくことが大変必要なことで、これも期待通りの成果を得られるものと安心しているところです。

本市の教頭会の集まりで大変ユニークな取り組みを紹介します。それは毎回のフリートークのディスカッションです。私自身、新任教頭であったとき、先輩の教頭先生のお考え、仕事ぶりに触れることが多々あり、こんなに参考になったことはありませんでした。「今度の教頭会でこんな話題でこんな事聞いてみよう」と毎回考えていました。各学校の実情、事例など共有する、先生方の教育観に触れるなど、まずは、教頭会の同僚性と捉えていくと考えてよいのではないでしょうか。素晴らしい取り組みであると自画自賛しております。

ひ　ろ　ば

1400年の時を越えて

宇都宮市立新田小学校　齋　藤　知　之

私が勤務する新田小学校は、約1400年前に造られた円墳４基からなる「針ヶ谷新田古墳群」という遺跡地に建設されました。昭和58年、学校建設に先立ち、学校用地内の３基のうち校舎の下になってしまう２基（１号墳・３号墳）の発掘調査が行われ、土器や副葬品などが出土しましたが、それらは現在、本校玄関に展示されています。また、校舎北側に位置する１基（２号墳）は、盛り土などをした上で、直径約10メートル、高さ約１メートルの姿で保存され日々来校者を迎えています。

古墳のある学校をインターネットで検索してみたところ、意外にも何校かの情報がヒットし、本校より大規模なものを擁している学校もあるようですが、全国的に見ても珍しい学校であることは間違いないと思います。

さて、1400年も以前に、この地に人が暮らしを営み、それから何十代と世代交代をしてきたことと比較すると、小学校６年間の営みなど、ほんの瞬間と考えがちではありますが、翻って、先人がその瞬間瞬間を精一杯積み重ねてきたことにより今日があり、我々がいるとも考えられます。私たち一人一人ができることはほんの些細なことかもしれませんが、次代を担う子どもたちのため教頭としての職責を果たしていきたいと思っています。

校章から思う

宇都宮市立国本中学校　坂　本　俊　二

左にあるのは私がこの４月から赴任した国本中学校の校章である。過去に全国緑化コンクール特選にも選ばれたことのある自然豊かな学校ではあるが、校章が「アリ」には驚いた。校旗も旗にこの校章がついているだけである。

この校章の由来を調べてみると次のようであった。

「この校章は、昭和31年本校に赴任した美術科教員のデザインであり、外側をつつむ盾の形は宇都宮の『ウ』を図案化したものである。中のアリは旧制第二高等学校（現在の東北大）の校章にヒントを得たもので、勤勉さを象徴している。この美術科教員の着任当時、ろうかは水ぶきされてぴかぴかに光り、歩く人の姿が鏡のように映ったほどだった。生徒たちが掃除や作業、その他いろいろなところで見せた素朴な勤勉さに、驚きの目を見張らされた。」ということであった。

昔から本校は場所柄もあり、地域との結びつきが強く、地域の祭り、体育祭、奉仕活動などの行事に協力して取り組んできたようである。

本校の教育目標の１つに「勤労を愛し実践力のある生徒」がある。生徒のようすを見ていると、いい伝統は受け継がれてきているのではないかと思う。

今後も頑張ってほしい。この校章に負けないように。

小規模校も負けてませんよ

佐野市立吾妻中学校　佐　藤　恭　子

教員としてのスタートを切ったのは、生徒数1,000人近い「マンモス校」と呼ばれる学校だった。思い返すと、卒業式の式場に全校生徒が入ることができず、１年生は教室の校内放送で中継に合わせて校歌を歌った頃もあった。また、運動会の入場行進や組み体操などはとても迫力があった。ろくに言葉を交わしたことのない生徒がかなりいる中で、毎日右往左往していたことを覚えている。

そして現在の小規模校勤務が３年目を迎えた。その間全校生徒は49名、42名、そしてとうとう今年31名、２つの学年のみとなってしまった。合唱コンクールはないし、クラスマッチもない。清掃はローテーションをしないと行き渡らないなど、人数の少なさを嘆くこともたびたびだ。しかしながら一方で、本校には誇れることも多い。まず、一人一人がよく動く。「私がやります。」と自ら言える生徒が実に多いのだ。また、「全校スピーチ」で全員が自分の意見を発表したり、全員が小学校へ出向き「絵本の読み聞かせ」をしたりと、活躍の場も多い。「全校数学」では、生徒３～４人に１人の教員がついて実施するので、きめ細やかな個別指導が可能だ。

本校を巣立っていく生徒が卒業後も自信をもって活躍できることを願い、私たち職員一同、日々奮闘している。

編集後記

暑い日々もようやく過ぎ去り、さわやかな季節を迎えようとしておりますが、会員の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

今回の会報では、定期総会、各部の活動、全公教の動き、秋田県で開催された全国大会等について掲載いたしました。

本会と本会を取り巻く状況がわかりやすく把握できるものとなっておりますので、会員の皆様には、この会報を今後の活動の参考にしていただければ幸いです。

末文ですが、お忙しいところにもかかわらず原稿を執筆くださいました方々に深く感謝申し上げます。　（神野）